

「住吉の語り部となりたい」 シリーズ第12回

料亭つたも主人・深田正雄

2012年3月22日

山田静江の細腕繁盛記と蔦茂再建

最後の旦那衆・祖父深田良矩の妻・静江の蔦茂再建エピソードをお伝えしなくてはなりません。料亭蔦茂の現在あるのはひとえに山田静江の努力と奮闘の賜物、そして、戦後は名物女将として創業100年の礎を築き上げました。

静江は明治25年4月26日蟹江町須成深田家近隣にて父・山田芳景、母・富田ハルの次女として出生、父が朝鮮開拓史として活躍するも行方不明となり母の再婚に伴い、十四山村の尼寺観音寺に姉、山田梅芳とともに預けられたと聞いております。住職尼僧・梅芳の徳行は近隣に知れ渡り、妹・静江も賢女として話題の姉妹であったようです。

名古屋で金融業を営む大正4年に家督相続した道楽息子・深田良矩にはうってつけの連れ合いとして、大正5年に結婚入籍八百屋町一丁目の蔦茂旅館にて新婚生活となりました。すぐ長男真一を授かりますが、出生とともに届け前に死去。小生の父、正矩は長男として大正7年2月11日に、次男・次郎は大正11年1月に誕生、八百屋町の自宅にて子育てに忙しい毎日を送って、良矩の事業発展を見守っていたようです。八百屋町店は自宅と雇い人宿舎であり、住吉二丁目の蔦茂が本店機能を果たし割烹の仕事は使用人任せであったようです。

しかしながら、昭和2年の金融恐慌により神田銀行破産に伴い良矩は連鎖倒産、そして、須成深田家から勘当・個人破産全てを精算、事業整理に伴い、戸籍上離婚した妻・山田静江がマイナスから商人宿として蔦茂旅館のみを残して再建、細腕繁盛記しながら頑張っ新しいスタートを切ったとの事です。八百屋町店の一部売却し、やっと落ち着き隠遁・逃亡？生活から戻った良矩と住吉二丁目26番にて旅館再興、三男三郎は昭和6年にて誕生、女将采配に全てを支えられて祖父はニワカ番頭を務めていたようです。

何度も三郎叔父が語っていました、「お袋は朝の送り出しから深夜のお客様の就寝まで働きっぱなし、横になって寝ている姿を見たことがなかった！」、小遣いを貰うときには、静江母は「必要なくらいでもあげるよ！でも、お母さんがいかに苦勞して稼いだ金かわかるよね。大切に使いなさいよ。」涙がこぼれて無駄遣いはできなかったといっています。

でも、ご主人良矩はノーテンキ、平気で宿屋の売上で狩猟や乗馬を楽しんでいたようですが、お得意の「女遊び」はお預けのようでした。

昭和初期の国鉄旅館案内には蔦茂旅館のオーナーは山田静江と表記され、建物も山田名義となっており、二人が戸籍上再婚するのは昭和14年1月まで待たなくてはなりません。

その後、太平洋大戦中は、一般の商人旅館としてではなく軍需工場の幹部宿舎として大曾

根・三菱電機、春日井・王子製紙など戦後のトップ方々の社宅として大いに静江は下宿のお母さんように面倒をみて、戦後の人脈作りとなったようです。しかしながら、昭和20年3月12日の大空襲で地域は全焼壊滅、焼け跡には名物・池の錦鯉が茹って浮かんでいたとの事です。

蟹江の疎開から戻った良矩夫婦は、兵役を免れた父・正矩とともに戦後一早く復興の宿舎提供という丸公の物資供給を得て昭和21年夏には都市区画整理計画に基づき名古屋で最初の二階建て旅館を建設いたします。ここで良矩が一生で初めて仕事らしいことで貢献したと親戚では語り継がれています。

仕事1、旅館完成したが塀をつくる金がない・・・米軍接收から逃れた私宝のレミントン猟銃を進駐軍将校に売却、その代金でヒノキとシバの黒塀を建設。現在でも粹な黒塀は住吉のシンボルとして名所となっています。

仕事2、酒がない・・・須成の弟胤次（明治27年生）が教員で近隣の教え子に「義侠」で有名な山忠本家酒造に依頼。燃料に困っていた酒蔵に多治見親戚富田弟（静江母の嫁ぎ先）ルートで御嵩から亜炭を馬車で輸送して、ヤミ酒を入手。一部は蔦茂で、残りは中村呉服店（現在のオリエンタルビル）平松さわさんに頼んで、栄のヤミ市場（現在のバスターミナル）密売で資金調達。亜炭輸送の馬車の調達は乗馬仲間の厩舎から。

仕事3、什器茶碗がない・・・多治見の義弟・富田が教育者として女学校の先生として活躍、その生徒の陶器卸からヤミ調達、良矩がリュックに詰めて連日満員の中央線で運んだ。これが唯一の肉体労働??と冷やかされていました。

ということで、良矩の道楽、鉄砲も、乗馬も、健康な体も、再建には大変役に立ったとのこと。何よりも幼少の頃から尼寺で仏の加護で育った静江の慈悲心が良矩の遊び豊かな人生を許していたようです。

次号に続く



昭和27年頃、戦後最初の鉄筋ビルに和室を建設、屋上の蔦茂神社にて深田良矩と静江